

て来たものと考えますと、「ふつと振返りて」と「願み
ねども其人と思ふに」という混乱したことば使いが偶然
にも存在することもそうした作品の成立事情を反映する
ものとして考えることができるように思います。(たけ
くらべ)は、「文学界」明治二八年一・二・三・八・十
一・十二・二九年一月号に連載) (文科四)

舞 姫 小 論

中 西 雅 彦

明治二十三年に発表された鷗外の青春の書である「舞
姫」は、太田豊太郎と言う秀才の独逸留學生が、漸く官
僚としての所動的、器械的な人間になることに疑をもち
始め、自我にめざめかけた時、偶然エリスと言う貧しい
が美しい踊子と恋仲になり、同棲して恋と自由を楽しむ
が、一方故国との絆も断ちがたく、たまたま来遊した友
人や大臣の練めによつて、結局はエリスを捨てて帰國す
るが、その為にはエリスは狂氣し、又、主人公も苦しむと
言う筋を回想形式でもつて描かれたものであるが、優雅

な文体とロマンチズムとエキゾテイシズムとにみちた
咏嘆でもつて書かれている。文学史的に舞姫は近代社会
に於ける最も早い時期の人間のめざめを表した作品とし
て位置づけられて来たが、戦後大石修平氏によつてエリ
スに対する主人公の愛を階級的な方面からみて、豊太郎
の側にふかい人間的な愛情が成立したとすることは幻想
が虚偽であるとされ、又この作品の主人公の美しさと弱
さは偽まんのそれだとして、ここにあるのは官僚の意識
であり舞姫と言う小説のあらはれたのは、新しい官僚の
文学の成立であつたとしておられる。

「雲に聳ゆる樓閣の少しとぎれたる処には晴れたる空
に夕立の音を聞かせて漲り落つる噴井の音、遠く望めば
ブランデンブルグの門を隔てて緑樹枝をさし交はしたる
中より半天に浮び出たる凱旋塔の神女の像」或ひは、「
この青く清らにて物問ひたげに愁を含める目の、半ば露
を宿せる長き睫毛に掩はれたるは何故に一願したるのみ
にて用心深き我心の底までは徹したるか。」とエキゾチ
シズムをみなぎらした、すぐれたロマンチックな描写で
もつて表されている。この点に關しては、あらためて論
ずる必要は無いであらう。紙面に制約されていることで

は、主人公、豊太郎の分析と舞姫との人間関係について考へてゆきたい。

主人公豊太郎は、「人の心の頼みがたきは言うを更らなら、われとわが心さへ変り易きをも悟り得たり」「中頃は世を厭ひ身をはかなみて腸日ごとくに九廻すといふべき惨病をわれに負はせ今は心の奥に疑り固りて……限りなき懐旧の情を喚起して幾度となく我が心を苦しむ嗚呼いかにして此恨を銷せむ」と言う、内心からきた裏切りを、あきらめの中で追懐して苦しむと言う廻想方式でものつて描かれる。

滞独三年にして自由な大学の風に當つて、官長の命のまゝに。「ただ所動的、器械的人物になつて自からを悟らざりき」と感ずいた時、「我母は余を活きた辞書となさんとし我官張は余を活きた法律となさんとやしけん」と思う様になる。ここには確かに封建的規範から真実の我にめざめかけた豊太郎を発見するのであるが、結局は「近代的な自覚はありながらも人間的に脆弱である。」と小田切氏の言う様な形で展開されてゆく。そうしてあきらめきつてしまつて、現実的な可能性を追求することなく、その結果として、恋人を裏ざることになり、感傷

的な咏嘆をもらすことに終つてゐる。主人公は常に弱いものとして描かれ、それによつてこの作品の主題が統一されている。この事は裏をかえせば「人間的めざめがはつきりした意識でもつて力強く貫かれたものでなかつたと言るのである、官僚としての自分を一応否定して、歴史や文学に心をひかれるロマンチックな人間であり、常に積極性や勇気を欠いた自主性をもたない環境に応じやすい人間としての豊太郎は、結果に於いて恋人を裏切りを得ない要素をほとんど最初から自分自身の中に持つていたのである、こうした弱さが、友人より「いっまでも一少女の情にかがぶりひて目的なき生活をなすべき……意を決して断て」との言に対して「情縁を断つと約しながら、しかもおのれに敵するものには抵抗すれども友に対して否とは之対へぬが常なりと言つた様な自己弁護とも言つた様な言葉でこじつけてしまふ、ここには自我にめざめる以前の彼が出てゐる様な矛盾がある。更に「若しこの手にしも縋らねば本国を失ひ名誉を挽きかへさん道をも絶ち、身はこの広漠たる歐洲大都の人の海に葬られんかと思ふ念、心頭を衡いて起れり」として遂に裏切つてしまふ。しかも最後においては友人に対し

て「我が脳裡に一点の彼を悪むところ今日までも残れり」と言つた自主性のもたないとも言へる結果にしている。

一方エリスに対する愛は、免官の時、エリスが母にその事を秘めることによつて「嗚呼余が彼を愛する心の俄かに強くなりて遂に離れ難き中になりしは此の時なり」ここには大石氏の言はれる様な階級的な優越意識は無い。しかし大臣が来るに及んで彼の心は二分されてゆくのである。「我が心の樂しきを思い玉へ、産れくるは君に似て黒き瞳子を得たらん、この瞳子、嗚呼夢にのみみしは君が黒き瞳なり」病床より起きて夫を送りだす可憐なエリス、従ひいかなることありとも我をば努を棄て玉ひそと言ふ彼女を捨ててしまふ、捨てられたエリスの姿はさまざま「直観したるままに傍の人も思ひ知らず我が名を呼びていたく罵り髪をむしりとり蒲団を噛みなどし」遂に狂つてしまふ、ここにはロマンチックなものを越えた栄達の前に裏切られた女主人公の姿が強くせまつてくるのではないだろうか、それはあざむき、裏切らざるを得なかつたとする主人公の自分の弱さに対する自責の念によつて生じる咏嘆よりも強い悲劇性がみられる。この点この作品の主題名が当に舞姫であると言ふことができ

る。(これは鷗外の意図するところではなかつたかも知れないが)こうした裏切りと自責の念、これはまさに二律背反をなすものである。それを主人公は弱いもの不可能なものとしてあきらめきつてしまつて感傷的な咏嘆に終らせてしまつてゐる。こうした太田豊太郎の人物的なめざめの弱さが、最後には自分の栄達を求め「自分自身の心の交りやすい」と逃げた様な人間となり、あきらめ、しかも自責の念にかられながら咏嘆しなければならぬ人間であつた。

しかし何故作者鷗外が一応、弱いながらも自我に自覚めて行く彼をか「若きヴェルテル」の如くせめて主人公の自殺でもつてこの作品の恋を純粹なものとしなかつたのだろうか、それは、やはり鷗外その人の性質及びその生き方によつたのであろう、あくまでも、現実を不可能なものとしてあきらめきつてしまひ、そのあきらめをあきらめとして肯定した上で展開する作品が「舞姫」であつた、そうしてこれが為作品のロマンチズムに分裂を来たした、感傷的な咏嘆に終止しなければならなかつたのである。しかしこの「あきらめ」は浮雲の主人公の場合の様な外的なものによるものでなく、豊太郎の内

心から来た功利性が基調にあるから「我々、我が心さえ
変り易き」と言わざるを得なかつたものであり、そこに
一つの人間の分裂を見る、しかし、反面、善玉悪玉小説
と言つた単なる理想小説、観念小説にならず、より人間
的な面を示しているものとも、言いえる、そうして、細
々とした豊太郎の心理の描写が単なる偽瞞としての自己
弁護のみに終らせずに、理論面に於いて二律背反に落ち
いつているとしても又、この人物の弱さは攻撃されると
しても、その苦惱はやはり人間的な苦惱であつたと認め
られる。こうした主人公の生き方は、歴史的な物を考え
とらえるならば、やはり日本社会の非近代的封建制のも
とで自我に目覚めつつも限界に突き当らねばならないと
云う悲劇性をよりよく表現しているとも云える、その意
味でこれは、明治を言う社会で封建制度下で、むしろま
れた青春の記録であつたとも云えるのである。

エリスに対する豊太郎の愛情は真実のものであつた、
しかし、又それを裏切つた事も事実なのである。

作者が何故彼を、恋のために生かさせなかつたか、裏
切つたものには、その後愛情があるはずはない、だか
らそれは完全な偽瞞の虚構だと簡単に云いのけることが
出来るだろうか、「舞姫」は明治の封建社会に処して行
かなければならなかつた、当時の青年の悩みであつた

らう、しかし、結局は、より安全な生活を求めていつた
当時の知識人の取つた態度が示されている。徳川封建社
会に於ては恋の悲劇が心中と言う形式で、封建制度の重
圧の下でもその恋の純粹性を保ち、現実社会にあきらめ
ながらも、人間性の主張を叫び死んでいつたが「舞姫」
においては、主人公をロマンチックな人間と規定しなが
らも、ヴェルテルの如く、恋の為に殉ぜしめず、裏切りに
終ると言うことは、作者の新しい人間的な自覚、自我に
目覚めつつありながらも、おのずからそこに、自分自身
で作つた自分自身を守るための限界を越えることの出来
なかつた々々ずるさとも言うものがある。結局は榮達を
とると言つた生き方をしてしまつたのであり、こうし
た傾向は当時の官僚の一般的傾向でさえあつたのではな
いかとも思われる。又舞姫に於ける作者、否、現実の鷗
外それ自身もこの例にもれなかつたのである。だから主
人公豊太郎の苦惱が深く苦惱として真実のもので
あつても、それに増して裏切られたエリスの、あの狂気
した舞姫の悲劇性の方がより切実に読者に訴つて来るこ
とは否定出来ないのではないだろうか、しかも一方裏切
つてしまつた豊太郎の苦惱と相まつて暗さの中で悲劇性
が強められている。功利性の故に裏切られたエリスの悲
劇と共に主人公を責めながらも、後進国日本人の、外国
に於てめざめかけた自我が、封建的な日本社会の重圧に
つきあつて、みづからあきらめてしまわねばならなかつ
た。言わばこれは、二重の悲劇である。(文科四)